

日本フィル「被災地に音楽を」 訪問コンサート レポート 第42号

被災地支援の訪問演奏は、2011年4月からはじまり、2018年11月30日現在、通算263回となりました。



ワークショップでの演奏

2018年9月28日 クリニック

会場:宮古市民文化会館

9月29日 ワークショップとミニコンサート

会場:崎山貝塚縄文の森ミュージアム

出演者 マイケル・スペンサー

通訳 富樫多紀

ヴァイオリン 佐藤駿一郎／竹歳夏鈴

ヴィオラ 中川裕美子

チェロ 大澤哲弥

ピアノ 伊藤慧

日本フィル「被災地に音楽を」は、三菱UFJニコス株式会社の支援を得て行っています。

地元教育委員会の熱心な協力を得て、毎年事業を行っている岩手県宮古市。今年はジュニア弦楽団体への楽器クリニック、小学生対象の音楽ワークショップ、そして付近住民を対象にしたミニコンサートを行いました。ワークショップの詳細について、随行いただいた鉢村優さんからレポートいただきます。

— 音楽ワークショップ「ド・霊・ミ！？オバケとの冒険！」

2018年9月29日、日本フィルは岩手県宮古市の「崎山貝塚縄文の森ミュージアム」で地元小学生とワークショップを行いました。

薄曇りの朝、いくぶん早い秋の足音を聞きながら、日本フィルのバスは「崎山貝塚 縄文の森ミュージアム」に到着しました。山口小学校と千徳(せんとく)小学校のスクールバンドに所属している子どもたち13名が今回の参加者です。ワークショップのメイン・ファシリテーターであるマイケル・スペンサー(以下マイクさん)がヴァイオリンを弾き始めると、立ち話をしていた一同は自然と耳と目を惹きつけられます。英国人のマイクさんお得意の、フィドル風の音楽です。



自己紹介をして、マイクさんのリードにしたがってみんなで歌を歌います。知らない歌に参加者は目を白黒。保護者のみなさんも参加してペアをつくり、手遊びを加えます。「せっせっせ」や「茶摘み」の要領で繰り出される振り付けに自然と顔がほころびます。ペアとペアを繋げて、やがて24人全員で輪になり歌って踊ります。ここまでくるともはや圧巻！これはアフリカの遊び歌で、リズムとメロディ、振り付けを教え合った参加者はすっかり仲間になりました。

リズムのワーク「タカタカタン」

そこでマイクさんは子どもたちを2つのグループに分け、「誰もが知っているリズムを見つけてみよう」とリクエストします。短いグループワークのあとにそれを発表して聞きあうと、マイクさんが「僕のリズムはこれです」と言って「タカタカタン」というリズムを叩きます。みんなもそれに合わせて手拍子をし、次は楽器でこのリズムを叩いてみることに。



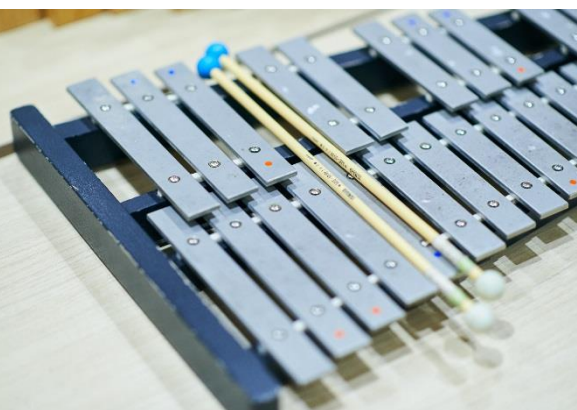
各グループのために用意された木琴には、ところどころ赤と青の付箋がつけられています。まず赤の付箋の音を自由に使って「タカタカタン」を演奏します。続いて青の付箋の音も。それぞれのグループを担当する日本フィルのファシリテーターたちは「どのくらいのスピードでやりたい?」「どうすればスイングするような音にできるだろう」と質問を投げかけます。すると子どもたちからいくつかのアイデアが生まれ、さらに意見を出しあってグループの「タカタカタン」を作っていました。



次は「タカタカタン」に伴奏を付けますが、同時に鳴らすのは同じ色の付箋が付いた楽器だけです。実は、同じ色の付箋は同じ種類の和音の仲間です。こうして色分けし、違う種類の和音が混ざらないようにすることで、スムーズに音楽作りを進めることができます。大きな枠組みだけ規定することで、かえって自由な工夫を引き出すことができるのです。

ワークショップの時間が経過するに従って、ファシリテーターの接し方も変わっていきます。時折「ちょっとみんなで考えてみてね」と声をかけてその場を離れ、子どもたちだけの状況を作ります。子どもたちは頼る人が居なくなったことに若干戸惑いつつ、じきに自分たちで声をかけあって音楽作りを進めていきます。

その後、それぞれ作った音楽を発表します。演奏し終わると、マイクさんは「それぞれどう違った?」「何回繰り返していた?」と沢山の質問を投げかけます。答えに窮する様子があると、もう一度演奏して聴いてみます…こうした聴取と振り返りの往復で、マイクさんは聴くことの解像度を上げていくのです。



オバケ、登場！



お昼休みを挟んで、マイクさんは話し始めます。「ヨーロッパでは真夜中にオバケが踊り出す、というお話があります」そして「レ↑ソ」という二つの音を示して、「棺からオバケが顔を覗かせて伸び上がるような音だね。『踊ろうよ！』という呼びかけを聴いて、オバケは様子をうかがっているのです」と語りかけます。「では、棺から出たり入ったりする感じをどうしたら出せるかな？」

午後はこのメロディを使って、午前中に作った音楽をさらに豊かにしていきます。宮古の子どもたちは互いに多くの言葉を交わし、ディスカッションをしているのが印象的でした。

最後に全体であつまり、マイクさんが物語の全体を紹介しました。一夜中に教会の鐘が鳴る。悪魔の旋律が登場し、骸骨は墓から出てきて棺を叩く。「ダンスパーティーを始めろ。一緒に踊ろう」悪魔もオバケも思いのままにどんちゃん騒ぎをしていると、やがて鶏の鳴き声が聞こえます。夜明けとともにパーティはお開き。オバケたちは墓場に帰っていきますー



そしてグループワークで作った音楽を発表し、最後に日本フィルがサン＝サーンスの『死の舞踏』をレクチャーつきで演奏しました。こうしてつい先ほどまで自分たちが作っていた音楽とサン＝サーンスの作品を並べて聴くことで、楽曲は子どもたちの中で「生きた音楽」として響くのです。

ワークショップ終了後、見学されていたヴァイオリン指導者の方は「こうやりたい、という子どもたちの発想の豊かさに感銘を受けた。大人はすぐに手を出したくなるけれど、それをこらえてアイデアを引き出す手法の巧みさ」について感想を聞かせてくれました。17時から是一般公開のミニコンサートも。マイクさんの司会で、『天国と地獄』『マリオネットの葬送行進曲』そしてサン＝サーンスの『死の舞踏』が演奏され、ワークショップに参加した子どもたちだけでなく地元の老若男女が日本フィルの演奏を楽しみました。大喝采のうちにミニコンサートは終了。再会を約束して、名残惜しくミュージアムを後にしました。

レポート: 音楽評論 鉢村優

写真: 平館 平



ミニコンサートの様子